

## 連載 23 『残菊物語』 目利きとしてのヒロイン

『残菊物語』は、実話にもとづく村松梢風<sup>しょうふう</sup>の小説、新派劇、そして映画とジャンルを横断して親しまれた物語である。映画は溝口健二監督 1939 年度作品で、『キネマ旬報』の当該年度第二位を獲得した。

明治の歌舞伎界、五代目尾上菊五郎（河原崎権十郎）の養子菊之助<sup>はなやぎ</sup>（花柳章太郎）は、周囲からちやほやされて芸が伸びない。菊五郎の実子、菊之助の義理の弟にあたる赤ん坊（のちの六代目菊五郎）の乳母のお徳（森赫子）が、菊之助の芸について直言し、周囲の甘言に乗らないように忠告する。菊之助とお徳は恋におちるが、お徳は暇を出され、菊之助は名跡も家柄も捨てて勘当される。菊之助は大阪にくんだり、地方のドサ廻りの巡業に加わり、芸は荒んでゆく。お徳は菊之助の親友中村福助（高田浩吉）に、菊之助の舞台復帰を頼み、菊之助と別れることを条件に受け入れられる。

芸道物と呼ばれる。身分違いの恋を責められ、不遇のうちに肺を病んで身を引くお徳に、オペラ『椿姫』に通じるメロドラマの王道を読む向きもある。男の芸の楽屋裏で命を捧げる女という構図に、すでに日中戦争の最中の、前線に立つ男性と銃後の女性との補完構造と並行する図式を読むという解釈もある。たしかに清水俊二は、『残菊物語』と『土と兵隊』（火野葦平原作、田坂具隆監督）を並べて「『残菊』と『兵隊』を中心に」（『キネマ旬報』1939年12月11日号）を批評した。

また、メロドラマの物語構造をもちながら、主役の二人をアップにしない独特のロングショット、ワンシーン・ワンカットの撮影も当時から議論の的となった。ワンシーン・ワンカットの撮影は、映画冒頭の『東海道四谷怪談』の場、菊之助が一座への復帰を許される『積恋雪関扉』<sup>つもるこいゆきのせきのと</sup>の場などで効果を挙げている。

清水千代太は「『残菊物語』合評」（『キネマ旬報』1939年10月11日）で「溝口のカットは長すぎて邪道といふ説もあるし、撮影を見てもその感じがなくもないが、この映画を見たら、幾ら長くても構はないと感じた」「ミディアムの長いカットで、大写を用ひず、花柳や森赫子の欠点をカヴァアして、美しく見させてみる」と評価している。欠点とは何か。花柳は、四十半



松竹京都撮影所『残菊物語』セットにて  
左から森赫子、花柳章太郎、溝口健二、坂根田鶴子（助監督）  
（『キネマ旬報』1939年10月1日号）

ばで二十代の若者を演じるという無理があり、森は万人が認めるメロドラマのヒロイン向きの美貌ではなかった。清水は「女としてはいゝでせう。しかし眉目よくはない。だから森赫子はお徳を生かして居ると思ふ」とまで語っている。

だが、『残菊物語』のお徳の役どころは、年下の男の芸に尽くし、病を得て、身を引き、息絶える悲劇的な弱い女というだけではない。彼女は、作中随一の芝居通、目利きなのである。映画冒頭の『東海道四谷怪談』引用の場で、菊之助は与茂七を演じ、菰を脇に抱え、なぜか色男ぶって鬢をなでつけながらの登場で驚倒させる。客は「ふろふきができそうな大根（役者）」と陰で笑う。だが顔を合わせれば、おべっか、お世辞ばかりである。これに対してお徳は、教養人でもなく読書人でもないけれど、その批評は厳しく、真摯で、だからこそ菊之助の心を捉える。旅回りに身をやつしても、芝居の向上だけをお徳はねがい、あきらめない。佐藤忠男はここに女の「意地」を読んだ。庶民の見者ではあるものの芝居の目利きであるお徳を演じて、森赫子には品と知性があった。